



令和7年度 授業改善推進プロジェクト 実践報告

生徒の「わかった！」を増やすための、教員相互の学び合いとICT活用

プロジェクトの目的：教室の「ドア」を開き、互いに学ぶ

背景

従来、授業は「個」の教員に委ねられがちでした。本プロジェクトは、その閉鎖性を打破し、全教員が参加する「**学びの共同体**」を作ることを目指しています。

目的

確かな学力の定着と、生徒が主体的に参加できる**授業づくり**。

手法

教科の枠を超えた「**授業相互見学**」と、即時のフィードバック体制の確立。



実施体制とスケジュール

Step 1: 10月

Step 2: 12月

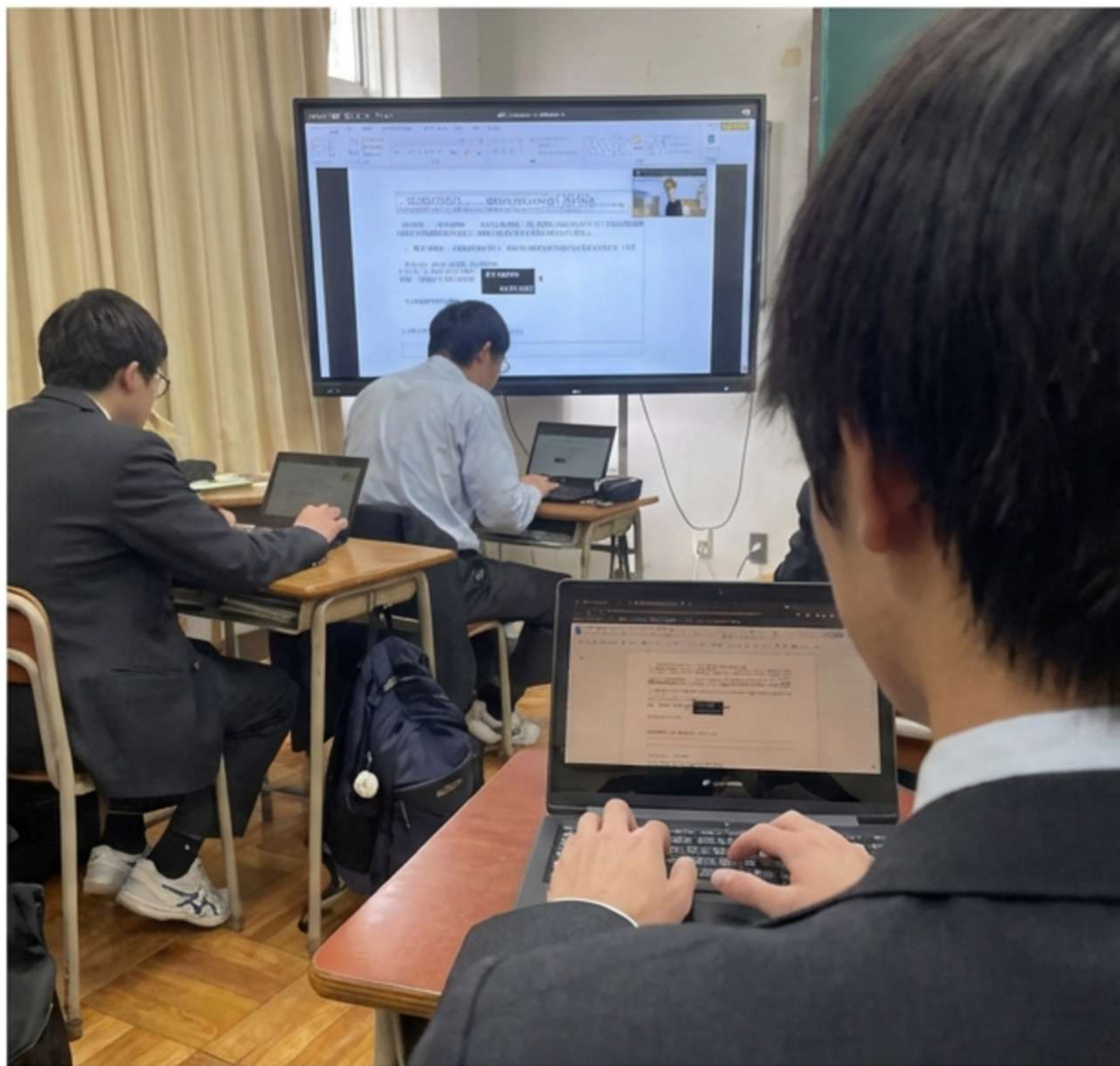


仕組み

全教員が期間中に1つ以上の授業を見学し、Googleフォームにて感想と改善案を入力。

実施期間中、多くの教員が教科の枠を超えて相互見学を実施。

テーマ① ICT活用：抽象的な概念を「可視化」する



• **Google Lens**：検索だけでなく、現実世界の情報を解析するツールとして活用。



• **Google Slides/Classroom**：生徒の考えをリアルタイムでスクリーンに投影し、瞬時に共有・比較。



• **デジタル教科書**：図形やグラフを拡大・操作し、視覚的な理解を促進。

「タブレットを活用することで、生徒の手元とスクリーンが連動し、視覚的な理解が深まっていると感じた。」

（保健体育科教員の感想より）

テーマ② 多文化共生：すべての生徒に「伝わる」授業へ 外国籍生徒が在籍するクラスでの工夫



やさしい日本語

専門用語を簡単な日本語や英単語に言い換える（例：化学基礎や保健）。



ルビと視覚支援

プリントの漢字にルビを振り、スライドを多用して視覚に訴える。



多言語対応

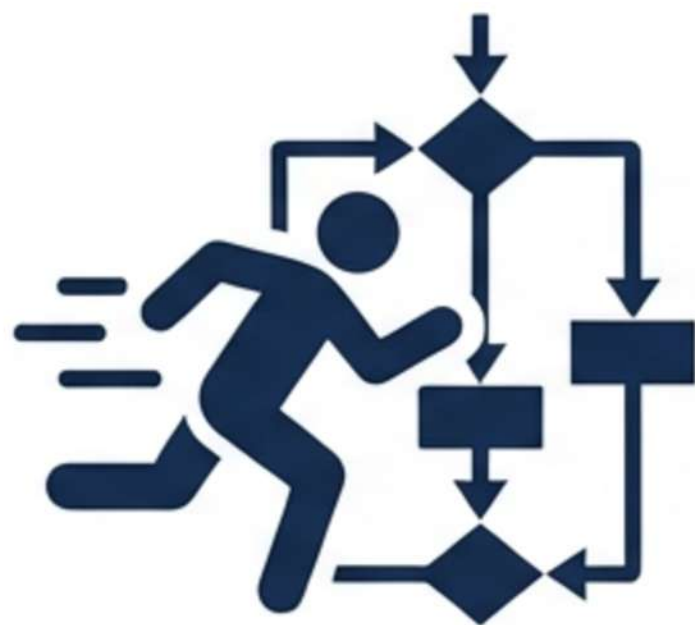
日本語版と英語版の資料を同時に共有。

「『やさしい日本語』の使用は、外国籍生徒だけでなく、難しい専門用語を学ぶ日本人の生徒にとっても理解の助けになっている。」

（理科・英語科教員の感想より）

テーマ③ アクティブラーニング：「聴く」から「動く」へ

Case 1: 情報A (アルゴリズム)



体感ワークショップ

アルゴリズムの仕組みを、実際に体を動かしてシミュレーションする活動。座学では眠くなる生徒も活き活きと参加。

Case 2: 言語文化



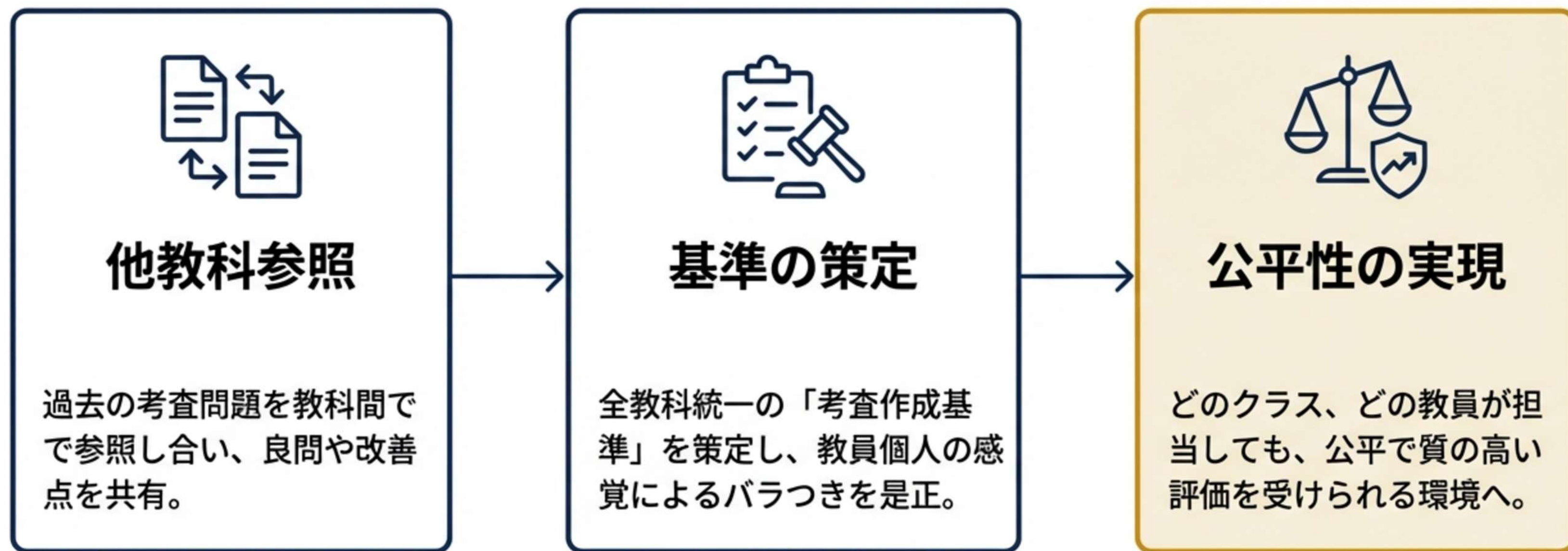
POP作成と発表

タブレットを用いて本の紹介POPを作成し、トランプで発表者を決めるゲーム性を導入。

成果：生徒の目が輝き、能動的に授業に参加する姿勢が見られた。

質の保証：考査問題作成基準の統一

授業手法の改善と並行して、評価の公平性を担保する取り組みを実施。



データが語る成果と課題（相互見学アンケートより）

Good Points（評価された点）

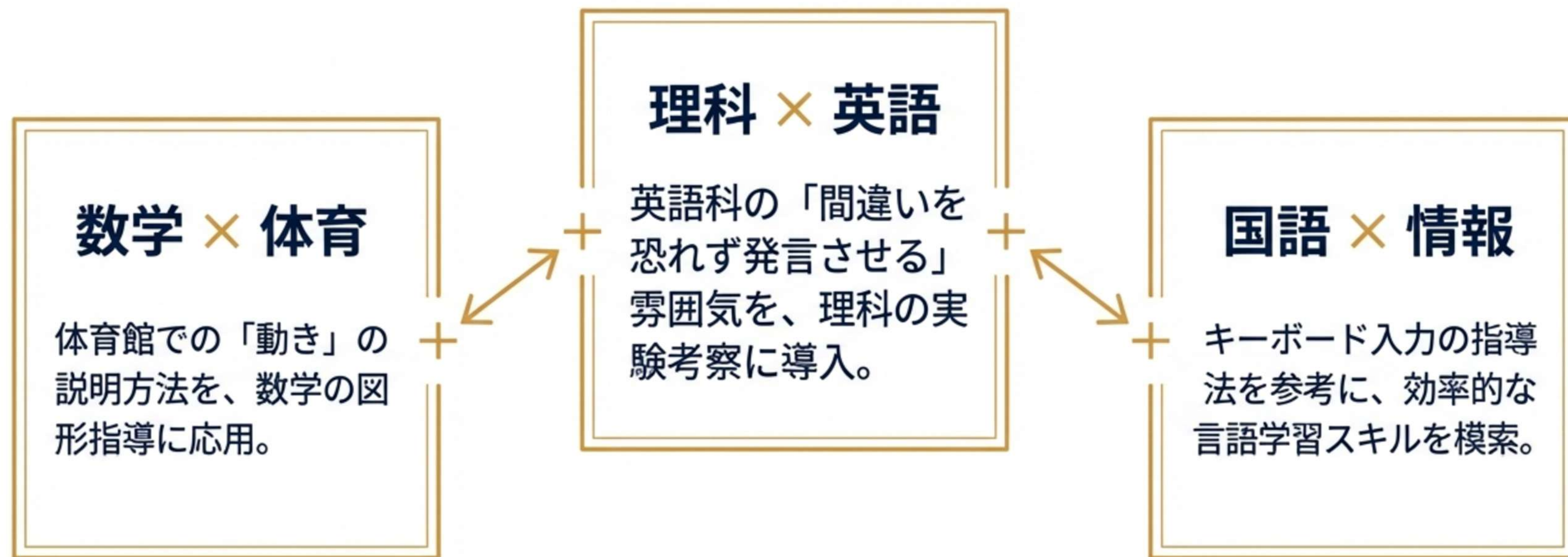
- **テンポと『間』**：生徒に考える時間を与える『間』の取り方が絶妙。
- **生徒への発問**：教師が一方的に話すのではなく、生徒に答えさせる場面の創出。

Challenges（今後の課題）

- **個と全体のバランス**：机間巡視（個別指導）をしている間の、他の生徒への手立て。
- **ICTトラブル**：タブレットの充電切れや、接続トラブルへのスムーズな対応。
- **板書量**：電子黒板と板書の最適なバランス。

教科の枠を超えた「化学反応」

専門教科が異なるからこそ、新しい視点が生まれる。



今後の展望：持続可能な改善サイクルへ

1.	全校共有 収集したアンケート結果（Good/More）を全教員で共有し、ベストプラクティスを標準化。
2.	ICTの日常化 特別な時だけでなく、文房具のようにタブレットを使いこなす段階へ。
3.	個に応じた指導 多文化共生の視点を持ち、生徒一人ひとりの理解度に合わせた「ユニバーサルデザイン」な授業の追求。